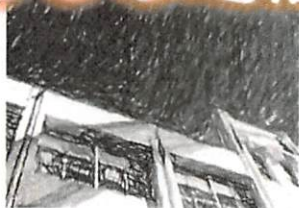


こきた通信



発行日：6月5日（月）

発行者：㊦（瀬上）

6月5日 朝礼

水泳の授業がはじまります。これまで、6年生によるプール清掃、ボランティアによるプールサイドや周辺の清掃、江南市を通じてプール床の補修をしていただきました。子どもたちには多くの人の支えによって、本日の水泳の授業ができることを伝え、感謝の思いにつなげていきたいと思います。

後半は、現在のブランコ前あたりに以前のプールがあり、当時はこの地区で初めてのプールであったことや、地域からの寄附とともに多くの人の力で手づくりのプールができたことを紹介します。しかし、時間が限られているため、十分に伝えることができません。学級活動などで紹介をしていただけると助かります。

三七、プールの竣工

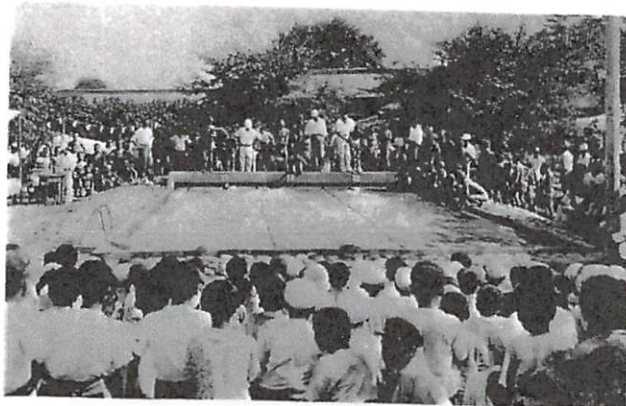
昭和十五年以前は、名古屋以北の小学校にはプールがない時代であった。

古北校では近くの小川を利用して水泳の授業を行っていたのであるが、田舎の川で不潔な浮遊物が多く、時には家畜などの死骸が流れてくることさえあった。

そこで毎年春先に村中が総出で川の清掃を行なって夏の授業に備えたのである。それでも上流からは汚物等が流れて来て子ども達は川に入るのを大変いやがったといわれる。木曾川に近い子ども達は水泳が得意であったが、遠く離れた子ども達は泳げず悲しい思いをしたのである。

当時の校長先生は岸延一先生で、高等科二年を担当しておられた奥村久男先生（後に昭和三十二年から三十五年まで校長先生を務められた）が、プールの必要性を痛感され、その建設のために各方面に懸命の説得を行われたのである。

そんな折、当時勝佐で織物業を営んでおられた津田寛重氏が、初老



プールの完成

記念として三〇〇円の寄付を申し出られ、それをプールの建設資金として使わせて頂くことになった。

しかし、セメント一〇〇袋、仮枠代、砂、人夫賃等に貴重な資金を使ってしまったので、工事は校長先生をはじめ、奥村先生を中心にした子ども達の労力率仕ではじめられたのである。

基礎のグリ石は下般若の石原寿郎氏の山から頂くことになったが、戦争の最中で大八車やリヤカーもなく、自転車を使った人海戦術で運ぶことになった。カバンや南京袋に石をつめて破ってしまう子どもや、手をすべらしてツメをはがして泣きだす子ども等もいた。

高等科二年の生徒には自分の体重の三分の一までの石を運べと命じられた。体力のある生徒にも過酷なことであるが、体の弱い子ども達には文字通り死ぬ思いの作業であった。それでも全員が必死になって頑張ったのである。中には自転車に石を積んで一日に七回も往復した者もあった。

約一週間かかって石の運搬は終わった。当時の関係者にとっては、苦勞して運んだ石のひとつひとつに深い思いがこめられていた。

「この古いプールがこわされる時には、苦勞して持ってきた石を集めて記念碑でも作って、後世に残したいものです。」と奥村先生は昔をしのんでしみじみと語られた。

物資不足の時代の手造りのプール建設は、現代では想像もつかない困難なものであった。鉄はすべて供出して全く使えなかったため、鉄筋の代りに竹を使いプールの底の基礎には、木曾川から護岸用の蛇籠を借りて使うといった苦肉の策も用いられた。

炎天下のもとで、石の運搬、コンクリート作業など、汗は濡れ手足に血がにじみ、疲労で腰がぬけてしまいそうな日が続き、ようやくにして精魂をこめたプールが完成したのは七月十九日の地鎮祭から二ヶ月後の九月はじめのことであった。

九月五日には多くの来賓の方々、関係者に見守られて竣工式が行われ、現江南市教育長野呂正光氏が模範遊泳をされた。困難な仕事をやり遂げた満足感で、万感胸に迫る思いの式典だったと思われる。

次の問題はプールの水であった。高等科二年の男子が四人で一組となって、十五分交替で井戸水を汲むのであるが、四日かかってようやく九分目程になるといった有様であった。これを見かねて、津田覚重氏が再び五〇〇円の寄付をされた。

それによって井戸小屋を作り、モーターを備えつけて、こんどは八時間で水が入るようになった。

現代と違って消毒槽がなく、三日に一度は水の入れかえが必要であったが、日中はプールを使うので、作業は徹夜で行われたが、モーターの馬力が不足して連続運転では焼きついてしまう。そこでモーターを止めては、冷やしながらの水汲みが行われ、汲み終わるころには夜が明けてしまうというのが常であった。手伝ってくれる子ども達のおやつにと、奥村先生は宿直手当の十五銭を使われたが、まだ足りない位であった。

それでも手で汲み上げていたことを思うと、有難く津田覚重氏に対する感謝の気持ちで一杯であったということである。

こうして夏中たくさんのお水を汲み上げるので、毎年五月には奥村先

生が先頭に立たれて、井戸さらえが行なわれた。

前述の如く、名古屋以北の小学校では唯一つのプールであったので完成以後は子ども達の水泳の力が上達して、どの学校にもひけをとらず、古北校（当時は古知野北尋常高等小学校）の自慢のひとつにもなった。

以来昭和五十五年の新しいプールの建設までの四十年間、古北校の施設として活用されたのであった。

本資料は 昭和55年古北小PTA
を中心にまとめた「古北のあゆみ」も
もとに紹介しています。



子どもが運んだ石

忘れてはならないこと
子どもは 木曾川から 石を運んだ
弱いものは泣いた
先生も 親も 力をあわせた
昭和15年夏 炎天下
手づくりのプールが みなで力できた
あれから 40年
つとめを終えたプールは、再び地にもどる
しかし 私たちは 当時の人の
協力と奉仕は忘れない
汗と愛も忘れてはならない
このプールがくれた夏も忘れない
忘れてはならないことを わすれないために
この碑を建てる

※この石碑は
プールの近くにありまう